

跡見生と桶川ストーカー殺人事件を学ぶ

● 室 田 康 子

(要約)

1999年に起きた桶川ストーカー殺人事件の被害者は、当時跡見学園女子大2年生だった猪野詩織さんだ。詩織さんは、執拗なストーカー行為を何度も警察に相談していたにもかかわらず、適切に対応してもらえず、命を落とした。マスコミによる報道被害も大きかった。事件は大きな反響を呼び、ストーカー規制法の成立につながり、報道のあり方を考えるきっかけとなった。筆者は、同大学の前期課程「現代ジャーナリズム論」で、この事件について学生とともに学び、詩織さんのご両親から直接話を伺う授業に取り組んでいる。学生たちの反応はまっすぐで、ひたむきだ。事件を自分に起こりうるものとしてとらえ、ジャーナリズムの功罪を学び、ストーカーから自分の身を守るための関心も高めている。跡見学園女子大は、詩織さんを忘れず、事件の真相と教訓を社会に発信し続ける拠点となりうるのではないだろうか。

はじめに

筆者は2017年度から跡見学園女子大前期課程の春学期と秋学期、「現代ジャーナリズム論」（全学共通科目）を担当している。桶川ストーカー殺人事件は報道被害の大きさとともに、ジャーナリストが真相を明らかにした点でジャーナリズム史上最も重要な事件の一つで、当初から取り上げてきた。2019年度秋学期からは被害者である詩織さんのご両親の猪野憲一さん、京子さん夫妻をゲストに招いて、学生たちに直接話をしてもらっている。2020年度はコロナ感染拡大によりオンライン授業となったが、猪野さん夫妻が作成したパワーポイントに二人の音声を録音したビデオを使用した。本稿では、授業の概要と学生たちの反応や感想を紹介したうえで、大学としてこの事件について発信し続けることで社会に貢献しうる可能性について提案したい。

1. 授業の概要

「現代ジャーナリズム論」の15回の授業で伝えていることは、三つ。まずジャーナリズムの意義と役割として、権力監視と社会的な問題の提起機能について学ぶ。二つ目は、事件報道などでの誤報や集団的過熱取材、プライバシー侵害など報道被害について。そして三つめは、従来のジャーナリズムからこぼれ落ちがちな社会的弱者に手を差し伸べるケアのジャーナリズムについてだ。終盤には、これらの要素すべてを含んだ事例として、桶川ストーカー殺人事件を2回にわたって取り上げている。2回のうち前半の授業では、事件の概要とジャーナリズムの功罪について学ぶ。学生には、事件を題材にした再現ドラマを見ることも勧めている。かいつまんで桶川ストーカー事件について触れておきたい。

大学へ向かう途中で

事件は、1999年10月26日午後1時ごろ、埼玉県桶川市のJR桶川駅前の路上で起きた。跡見学園女子大新座キャンパスでの授業に向かおうとしていた猪野詩織さんは、乗ってきた自転車を止

めたところで背後から来た男に胸などを刺され、出血多量のため死亡した。

詩織さんはその数か月前からストーカー行為に悩まされ、埼玉県警上尾署に相談していた。彼女は同年1月、大宮市内のゲームセンターで知り合った男性と付き合い始めたが、しばらくして男性の異常な性格に気づき、別れを切り出す。そのときから執拗なストーカー行為が始まった。ひっきりなしの電話や自宅周辺の徘徊のほか、男性と仲間が自宅に乗り込んできて金を出せと脅迫したり、詩織さんの中傷するビラが自宅の周辺や大学、最寄り駅などに大量にまかれたりした。詩織さんの写真に「援助交際 OK」と書いたカードがばらまかれたり、父親の憲一さんの会社に父娘を中傷する手紙が700通届けられたりもした。

詩織さんは「三度殺された」

しかし、上尾署ではまともに対処してくれなかった。詩織さんと両親は何度も足を運び、告訴状を提出した。告訴すると、警察には捜査義務が生じる。にもかかわらず、警察は動かなかった。告訴状を捜査義務のない被害届に改ざんまでして知らん顔をしていた。そんななかで殺人事件が起きてしまった。報道合戦も始まった。

記者会見で警察の担当者は、ストーカー行為との関係や告訴状を受け取っていたことをきちんと説明せず、詩織さんの服装を「黒のミニスカート」「厚底ブーツ」「プラダのリュック」「グッチの時計」などと発表した。実行犯が金で雇われた別の男だったため、当初は犯人像がつかめなかったせいだとしても、被害者の服装や持ち物をそこまで細かく説明するのは異常だった。リュックや時計は詩織さんが自分でアルバイトして買ったものだったが、一部のマスコミは「派手で遊んでいる女子大生」「ブランド依存症」というイメージを勝手に作りあげた。また、埼玉県警の幹部が「被害者は水商売で働いていた」という情報を流し、詩織さんは「性風俗嬢だった」という報道まで現れた。事実は、友人に頼まれてスナックで2週間ほどアルバイトをしたことがあったが、やっぱり自分にはできないと給料も受け取らずに辞めていた。元気で明るく家族思いの普通的女子大学生だった詩織さんが、いつの間にか派手な遊び人になり、被害に遭うのも仕方がないという印象が出来上がってしまった。マスコミが警察の発表を鵜呑みにし、それを勝手に拡大解釈したことによるのだが、警察側も、告訴状にきちんと対応しなかった失態を隠すため、被害者の側にも原因があるような印象操作をしたと考えられる。

猪野さんの自宅前には一日中報道陣が張り付き、家族は買い物にも出られない状況で、二人の弟の通学にも支障が出た。そんな中で遺族を苦しめたのは、事実にもとづかない報道の数々だった。テレビのワイドショーではコメンテーターが「大金を使っても殺さなければならないほどの裏の事情があったのだろう」などと勝手な憶測を振りまいた。父親の憲一さんは「娘は三度殺された。犯人に、捜査を放棄し改ざんをした警察に、そして事実を探り出さずデマを流したマスコ



跡見学園女子大の入学式で、満開の桜と図書館を背にした猪野詩織さん＝1998年4月、猪野さん提供

ミに」と話している。

ジャーナリズム貫いた記者も

そんな中でも、警察の発表に頼らず現場を繰り返し訪れ、詩織さんの友人への地道な取材を通じて犯人に近づいていたジャーナリストがいた。写真雑誌「FOCUS」（2001年に休刊）の清水潔記者だ。清水記者は、詩織さんが生前、付き合っていた男性から殺されるかもしれないという恐怖を抱き、ストーカー行為について友人に詳しく記録してもらっていたことを知る⁽¹⁾。詩織さんが付き合っていた男は池袋の風俗店のオーナーで、名前も仕事も偽って詩織さんに近づいていた。清水記者は連日池袋に通って聞き込みを続け、遂に詩織さんを刺した実行犯にたどり着く。その男の写真も撮り、清水記者は情報を埼玉県警に伝えた。それでも、警察は動かない。

一方で、父親の憲一さんから清水記者に連絡があった。詩織さんの友人から清水記者のことを聞いた憲一さんは、この記者なら信頼できると考えたのだ。話をするなかで、清水記者は猪野さん宅に告訴状を取り下げてほしいと言ってきた警察官がいたことを知る⁽²⁾。告訴は一度取り下げると二度とできないのに、警察官はいつでも再提出できると嘘をついていた。清水記者は、警察が犯人逮捕に動かないのは、詩織さんが助けを求めたときに警察がきちんと対応していれば、詩織さんは死なずにすんだといわれると困るからだと気づく⁽³⁾。

清水記者が雑誌「FOCUS」でスクープ記事を出すと警察に宣言した直後、警察は実行犯を逮捕した。しかし、詩織さんがつきあっていた男は行方不明で、結局、後に北海道で自殺しているのが発見される。「FOCUS」は続いて、埼玉県警の詩織さん家族に対する不適切な対応や無気力な捜査を批判する記事を掲載。それらを読んで、テレビ朝日の報道番組「ザ・スクープ」のキャスターだった鳥越俊太郎さんも、番組で警察対応の問題点を指摘する報道を展開していった。

国会でも追及が行われた。竹村泰子参議院議員（当時）が警察の対応について質問。後日、埼玉県警本部長は記者会見で詩織さんの告訴状を改ざんしていたことを認め、「捜査が全うされていれば、殺害は避けられた」と謝罪し、猪野さん宅を訪れて夫妻に頭を下げた。上尾署で告訴状改ざんにかかわった3人の警察官は懲戒免職になった。

清水記者や鳥越さんの執念のスクープがなかったら、実行犯が捕まり、真相が明らかになることはなかった。彼らの仕事によって、詩織さんはそれまで報道されていたような人物ではないことも明らかになった。

この事件をきっかけに、ストーカー規制法成立への機運が急速に高まり、異例の速さで翌2000年5月18日に成立。この日は詩織さんの誕生日だった。猪野さん夫妻はその後、ストーカー規制法改正に関する検討会の委員を引き受けるなど、ストーカー被害をなくすために尽力し続けている。

授業では、清水記者や鳥越さんの仕事こそ、真相究明と権力監視というジャーナリズム本来の役割を果たしたものと伝えている。警察発表を鵜呑みにせず、詩織さんが残した小さな声をたどって地道に取材を続けて真相に近づいた清水記者の仕事の仕方、警察の捜査や体制の問題点を粘り強く追及した二人の報道姿勢。このようなジャーナリズムがあってこそ民主主義社会は正常に機能する。ジャーナリズムは私たちの社会に必要な不可欠なものなのだとすることを学生たちに強調している。

一方で、大きな非難を浴びた報道被害の実態についても知らせなければならない。桶川ストーカー事件では、押し寄せたマスコミの取材攻勢（集団的過熱取材）で遺族の生活は大きく脅かさ

れた。「ブランド依存症」「風俗嬢」など詩織さんに関する間違っただ情報が大量に流れて、愛する家族を亡くして悲しんでいる遺族をさらに苦しめた。清水記者らの仕事で名誉回復されたとはいえ、当初流れた間違っただ情報のほうが圧倒的に多く、いまでも詩織さんや事件について誤解したままの人も少なくない。これらマスコミの問題点はきちんと伝えて修正していかなければならない。この事件に限らず、間違っただ情報が流れることは今もある。そんなときには情報を鵜呑みにするのではなく、冷静に受け止められるようメディア・リテラシーを身につけていかなければならないと繰り返し学生たちに話している。

娘が通った大学で授業

そして次の授業で、猪野憲一さん、京子さんの話を聞く。

2019年に筆者が猪野さん夫妻を訪ねて、詩織さんが通っていた跡見学園女子大でゲスト講師として話をしてほしいとお願いしたとき、二人は随分、驚いておられた。それまでも犯罪被害者の会や警察、大学などで講演した経験はあるということだったが、詩織さんが通っていた大学で、当時の娘と同じ年頃の学生に語りかけるのは、特別の感慨があるということだった。それでもすぐに快諾してくださり、2020年1月に初めての授業が実現した。場所は、花蹊メモリアルホール（履修生が多いので通常からホールを使用）。

当日を迎えるまでには少し紆余曲折があった。猪野さんから跡見で授業をすると聞いた共同通信さいたま支局の記者が当日の授業の様子を取材してほしいと言ってきたのだ。しかし、事前に学生たちに取材のことを説明する時間がなかったことや、授業中の取材は原則として受けないという大学当局の方針もあり、断らざるをえなかった。だが、桶川ストーカー事件を風化させず、きちんと取り組み、学んでいることが社会に伝えられるのは、大学にとって決してマイナスではない。いつかは取材を受けて広く報道してもらいたい日があるべきだろうと考えている。

真剣に聴く学生たち

猪野憲一さんと京子さんを迎えたその日の花蹊メモリアルホールは静まり返っていた。憲一さんが少し緊張した様子で、パワーポイントを使って話を始める。詩織さんの子どものころからの写真が何枚も写され、両親や弟たちと一緒にの写真からは、仲のよい家族のなかでのびのび育った様子が伝わってきた。1998年4月に跡見学園女子大に入学し、新座キャンパスで桜と図書館をバックに撮られた黒いパンツスーツ姿の詩織さんが映し出されると、学生たちは普段見慣れている風景だけに、ハッと息をのむのがわかった。遠い事件ではなく、一気に自分と身近なこととして感じられたようだった。

憲一さんから改めて事件の詳細が語られる。その前の授業で概要を知っていても、実際に被害者遺族から話を聞くのは伝わり方が違う。ストーカー被害を訴えて警察に助けを求めたときの冷たい反応、事件後のマスコミの名誉毀損といえる心無い報道には、学生たちはとくに大きなショックを受けた様子だった。

授業の途中、母親の京子さんが「これからも娘とともに」という文章を読み上げた。事件後、犯罪被害者の会での活動が京子さんを支えてきたが、ときに気力が萎えそうなきももある。「どうしようもなく落ち込んでしまうとき、21歳の娘が言います。お母さん、大丈夫？ ファイトよ、ファイトだよ。肉体はなくても、娘は私の心の中に生きているのです」「話すことすらできなくなった娘のため、生きることを許された母親の務めとして、これからも一生、真実を語る活動を続けていく覚悟です」と話すと、ホールのあちこちからすすり泣く声が聞こえた。



「現代ジャーナリズム論」のゲスト講師として学生たちに話をする猪野憲一さんと京子さん＝2020年1月、跡見学園女子大花園メモリアルホールで

加害者は犯罪者であり、被害者は悪くないことを理解してあげてください」と訴えた。ストーカーは極めて粘着質な性格を持っており、被害に遭わぬよう十分注意すること、ジャーナリズムの役割を学んで、しっかりした目をもってほしいということも付け加えてくださった。

授業が終わった後で感想を聞くと、憲一さんは壇上に立って学生たちの顔を見たとき、まるで詩織さんが座っているような気がして、こみ上げるものがあったということだった。京子さんは、詩織さんと一緒に入学式に来たときのことを思い出して胸がいっぱいになったと話しておられた。

2. 学生たちのレポートから

学生たちに授業の感想文を書いてもらった。ほとんどの学生は犯罪被害者の話を聴くのは初めてだったが、直接話を聴くことができると本当によかった、貴重な体験だった、と書いていた。そして、同じ大学で学んでいた自分と同じような女性がなぜ殺害されなければならなかったのか、犯人に怒り、警察の対応に怒り、マスコミ報道に憤っていた。一部を抜粋して紹介する。

「事件の真相とそれに対するお二人の思いを感じ、衝撃だった。貴重な体験で感謝としか言いようがないです」

「お父さんとお母さんは、とてもつらいはずなのに、私たちのために一から話してくださって、事件の恐ろしさを学ぶことができました」

「同じようなことが自分の身に起こる可能性があるということを思い知らされました」

「聞くのがつらい部分もありましたが、私たちには『知る権利』というか『知る義務』があるんだと思いました」

「殺害した犯人だけでなく、捜査放棄した警察、面白おかしくデマを流したマスコミ、三度にわたってひどい対応をされるというのは、苦しいという言葉では表しきれないくらいつらいものだと思います」

「警察に相談に行ったときに、親身に話を聞いてもらえていたら、事態は変わっていたかもしれないと思います。告訴状を被害届に改ざんするなど、犯罪を取り締まる警察が犯罪まがいのこ

犯罪被害者の会を通じての京子さんの活動は、犯罪被害者等基本法の成立につながった。また、当初成立したストーカー規制法にはSNSを使った付きまといに対する規制がないなど不十分な部分もあったが、改正のための検討会に夫妻で委員として加わり、法整備に力を尽くしてきた。授業では、近年のストーカー事件やドメスティックバイオレンスの状況についても、警察庁の統計をグラフで見せながら説明してくれた。

そして最後に、学生たちに向けて「生命の大切さを一番考えてください」「マスコミ報道等を鵜呑みにしないでください」「ストーカーの

とをしていて、本当に腹が立ちました」

「事件当時、マスコミや評論家、コメンテーターと言われる人たちが好き勝手にひどいことを言っていたということを聞いて、本当に胸が痛みました。何も疑わずに信じる人がどれほどいたのか気になります」

「ストーカー規制法ができたのはこの事件のおかげなので、事件のことを一生忘れてはいけないと思いました」

……

「FOCUS」の清水記者や鳥越さんらの「ザ・スクープ」の仕事について触れたものも少なくなかったが、それについては後述する。

感想文は個人情報伏せて猪野さん夫妻にお渡しし、読んでいただいた。後日、猪野さんから届いたメールにはこう書かれていた。

「よく講演を聞いてくれたな、詩織の殺害の悲しみ辛さ、犯罪の怖さ、警察の対応、マスコミの対応、遺族の被害の長期化の現実、優れたジャーナリストの存在と役割と成果、今後の自分の生き方等、色々考えてくれていることが分かり、学校に伺った成果が大いにあったことを実感し、感動しております」

二人の声が心に沁みとおる

以降、毎学期「現代ジャーナリズム論」の授業の終盤にゲスト講師として話してもらうことになった。2020年度はコロナ禍でオンライン授業となり、どうするか迷ったが、最初の授業で憲一さんが作ってくださったパワーポイントを更新し、二人に説明を録音してもらうことで実現させることができた。実際に姿を見ることができなくても、静かで感情がこもった二人の声は、学生たちの心に沁みとおったようだった。それでも、やはり直接大学に来ていただいて、対面で話を聞くことができればもっとよかった、という声が多かった。

このときの学生たちのレポートは、二人の話への感想だけでなく、それまでに学んだジャーナリズムの役割や功罪について書いてもらう形にした。期末レポートのため長いので、一部を省略したうえで、2編を紹介する。

「桶川ストーカー殺人事件について」(2年生)

桶川ストーカー殺人事件は、ジャーナリズムの良い面と悪い面がよく現れている事件である。悪い面とは、記者たちが遺族らに対して集団的過熱取材をして大きな苦痛を与えてしまったことや、警察が流した嘘の情報を鵜呑みにしてしまい面白おかしく嘘の報道をしてしまったことだ。この嘘の報道で被害者のプライバシーや人権を侵害し、名誉を傷つけることとなった。真実を報道すべきジャーナリズムが、警察の嘘の情報だけを鵜呑みにして自分たちでは新たな取材をせずに報道してしまうことで、被害者や遺族を傷つけてしまうなんて最悪のケースだと感じた。さらに記者たちは被害者の自宅に集団で過熱取材をし、日常生活までも奪ってしまった。被害者遺族からすれば、真実を報道してくれるはずの記者が権力に加担して本当の人格とは全く違う人格や、印象操作するような写真ばかりの嘘の情報を流し、それによって追い込まれて日常生活を奪われるなんて憤りを感じただろうと思う。

しかしこの事件ではジャーナリズムの良い面もあった。それは本来の役割であるジャーナリズムの力が十分に発揮されたことだ。具体的に述べると、警察などの権力を持っているものが報じられたくないと思っていることや真実を報じて、埋もれてしまっていたかもしれない事件の真相

を示したということだ。この真の報道をしたのは清水潔さんと鳥越俊太郎さんたちだ。この人たちが真実への追求をしたことで事件は解決に向かい、国が動き異例の速さでストーカー規制法が成立した。清水さんは警察の情報を鵜呑みにせず、殺害現場に自ら足を運び、被害者の遺族や周りの人間に直接真実を聞こうとした。さらに、被害者の周りにいた人物から聞いた真実を元に、独自で調査を進めていった結果、実行犯の居場所や人物を特定したのだ。本来警察がやるべきことも行い、逮捕に繋がった。そこからやっと、嘘の情報が撤回されていき、真実の記事が流されていった。さらに、鳥越さんは当時流れていた警察の会見やマスコミから流されたことを否定し、清水さんの言う報道の方を信じた。若い刑事が言った「告訴状は取り下げてもすぐ出すことができる」という嘘がひっかかった鳥越さんは、後日警察への取材を元に真実を報道し、国会や埼玉県警にまでそれが届いて、上尾警察署が調べられる結果へと繋がった。この2人の記者を中心に報道された真実に基づき、各メディアは桶川事件の認識を新たにした。

この事件のことを学び、ジャーナリズムは既にある情報だけを鵜呑みにして報道してはいけないと感じた。警察は、真実をつきとめて悪い人々を取り締まる組織だ。しかしそんな警察までもが嘘の情報を流し、最悪な結果を招いている。世に情報を発信するマスコミたちは権力の有無や嘘の情報に惑わされずに、何が正しくて何が間違っているのかを明確にして報道していかなくてはならない。それを踏まえた上で、記者自らが取材して隠されていたことを暴露することがとても大切だと感じた。その記者の正しい行動や報道により、間違った方向に向かっていった事件が解決につながり国までも動かせる。ジャーナリズムはそれほど大きな存在なのだと感じた。(後略)

「鈍感なわたしたち」(2年生)

殺人事件の被害者には、家族がいて、友だちがいて、暮らしがあった。私たちは、そんな当たり前のことを時に忘れてしまうことがある。過激な報道に煽られ、被害者への誹謗中傷を平気な顔ですることすらある。他人だからだ。他人だから、間違った報道のかたちに鈍感になれる。

桶川ストーカー殺人事件の被害者である猪野詩織さんは、私と同じ大学に通い、同じ駅を利用し、同じキャンパスで勉強していた。私は詩織さんと自分を自然と重ね合わせていた。

私は、桶川ストーカー事件を事例としてジャーナリズムについて考えることで、自分自身の報道や情報に対する向き合い方を見つめ直したいと思った。まず報道被害について考えた。桶川ストーカー殺人事件の発生当時、警察の言うことを鵜呑みにしたメディアによって、被害者について誤った報道がされた。これによって、詩織さんは普通的女子大生であったのに、特別な女子大生に仕立て上げられた。殺された原因は被害者にある、と言わんばかりの報道によって詩織さんの名誉は著しく傷つけられた。真実が明らかになったとしても、世間に一度与えられた情報やイメージは完全に払拭することは出来ない。これが話題性重視の報道や雑な取材をした人間の大きな罪だ。

また、遺族の自宅にマスコミが押しかけることで、遺族が日常の生活を送ることが難しくなってしまった。マスコミの過激な取材によって、遺族は静かな日常さえも奪われてしまった。取材のあり方、報道のあり方は、もっと被害者に配慮されたものであるべきだと思う。被害者は、事件が起こるまでは、普通の暮らしを送る、普通の人たちであった、ということを忘れてはならない。(中略)

猪野憲一さんから誤った報道への憤りの声を伺った時、私は胸が痛くなった。誤った報道は、事件に関係のない人にとっては、ただの情報に過ぎない。情報が間違っていたと言われれば、ああそうだったのか、となるだけだ。報道機関への不信感を感じたとしても、1週間も経たぬうち

に忘れてしまうだろう。しかし、当事者は違う。愛する娘さんを侮辱されたご両親の気持ちを考えると、やりきれない。

私たちはメディアの報道を疑うことに消極的だ。特にテレビや新聞の報道には、信頼がある。その情報が正しいかどうかより、インパクトのある情報に飛びつきやすい。もっと冷静に報道を捉えるべきだと思う。さらに今は、事件当時よりもインターネットが普及し、SNS等で誰もが発信者になり得る。誤った報道を鵜呑みにし、それを他の人に広めてしまうことは、あってはならない。自分自身も間違った情報発信によって誰かを傷つけてしまう恐れがあることを自覚するべきだと思う。

清水潔記者らの取材によって、事件の真実が報道された。清水記者の権力に屈せず、被害者家族に寄り添う姿勢は、絶対に埋もれてはならない真実を明らかにした。この報道がきっかけとなり、ストーカー犯罪に関する法律が作られた。清水記者によるケアのジャーナリズムは、詩織さんと同じようにストーカー被害に苦しむ人に手を差し伸べることに繋がった。

猪野憲一さん、京子さんのお話を伺って、事件の当事者にしか分からない痛みや恐怖、苦しみがあることを痛感した。そしてそこに他人がズカズカと入っていくおぞましさを感じた。間違った報道をしたメディアと清水記者の大きな違いは、当事者の痛みに寄り添う気持ちだったと思う。確かに事実を正確に報道する上で、記者の個人的な感情は邪魔なものかもしれない。しかし、真実を追い求める上で事件の当事者に対して誠実であろうとする姿勢は大事だと思う。また、情報の受け取り手である私自身も、真実を知りたいなどと心から思ったことがあったのだろうか。結局私も報道に踊らされているだけなのかもしれない。権力を監視することがジャーナリズムの役割ならば、ジャーナリズムの誠実性について監視することは私たちの役割だと思う。(以上)

ほかにも「この事件を通してジャーナリズムの必要性和ジャーナリズムが実生活に大きくかかわっているということを知ることができ、とても勉強になった」「被害者から話を聞いたことが初めてでパソコンを前に緊張したけれど、想像以上に内容が濃くて話を伺うことができてよかった。本日聞いた話を忘れずこれからの人生を過ごしていきたい」「跡見生としてこの事件を知ることができてよかったと思っています。この事件のことは忘れません」と書くなど、学生たちにとって貴重な体験になったことがうかがえた。

3. 社会への発信を見据えて

桶川ストーカー殺人事件を学ぶ授業は今後も続けていくつもりだが、できれば「現代ジャーナリズム論」履修する学生だけでなく、跡見学園女子大に通う学生すべてに事件の真相を知ってもらいたい。もっと多くの学生が猪野夫妻の話を聴く機会を持てるようになればいいし、図書館に関連のコーナーをつくって事件に関する書籍や雑誌、ご両親の思いをつづった文章などを置いて、いつでも見られるようになればよいと思う。そこからジャーナリズムの意義や役割に触れ、学んでいってもらえたらよい。

また、ストーカー対策としても意味がある。詩織さんは相手の行為をメモしたり録音したりして、きちんと証拠を残していた。猪野夫妻は授業のなかでストーカー規制法の内容を説明し、早めに家族や友人、警察に相談するなどストーカーから身を守ることの重要性を訴えている。事件を学ぶことは、20歳前後の若い女子学生たちにストーカー被害の恐ろしさを伝え、対処法を知らせるという意味でも大いに役立つと思われる。

そしてさらに、学内にとどまらず、広く社会への発信を見据えられればと考えている。その切

り口は、やはりジャーナリズムだ。具体的には、事件について考えるシンポジウムを開いたり、桶川ストーカー事件の教訓が現在のジャーナリズムに生かされているかを検証する研究会を企画したりすることだ。桶川ストーカー事件は、ジャーナリズムに携わる者に二つの大きな課題を突き付けた。警察情報を鵜呑みにせず、権力と距離をとり、真相に近づくにはどうすればよいのか。犯罪被害者を傷つけず、守っていくにはどんな取材・報道をすればよいのか。20余年を経て、これらは今、どこまで改善されただろうか。あるいは悪化しているのだろうか——。桶川ストーカー殺人事件を通じてジャーナリズムの現状を繰り返し点検することは、この国のジャーナリズムを鍛えていくことにつながると筆者は考える。その拠点に跡見はなりうるのではないだろうか。

立教大の活動も参考に

大学を拠点にして社会に発信する活動はどうつくっていけばよいのか。参考になる事例がある。立教大学で続いている詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）を追悼する活動だ。

尹東柱は太平洋戦争中の1942年に創氏改名して来日し、立教大学に入学した。半年後には京都の同志社大学に移り、まもなくハンゲルで詩を書いたことから治安維持法違反容疑で逮捕され、福岡刑務所に収監。終戦の半年前に、27歳で死亡した。彼が遺した詩は戦後、韓国で教科書に載るなどして、国民的詩人となっている。

日本は彼を死に至らせたことになる。その歴史を受け止めつつ、尹東柱を追悼し、彼が残した清冽な詩を愛しむ集い「詩人尹東柱とともに」が2008年から毎年、立教大学の礼拝堂で開かれている（2021年はコロナ禍のため中止）。主催は「詩人尹東柱を記念する立教の会」で、同大学の卒業生や関係者が中心になっている。代表の楊原泰子さんによると、集いだけでなく、同会のはたらきかけにより立教学院展示館で尹東柱を紹介する二度の展示会が開催され、同館には尹東柱が立教大在学中に書いた5編の詩の原稿の複製が常設展示されている。

立教大学にとって尹東柱は、明るいばかりの存在ではない。彼が学んでいた当時は、温かい支援もあったろうが、時代の制約のもと、差別などもあったはずだ。それらすべてを受け止め、尹東柱の生涯を伝えていこうという活動は、日本社会にとって、日韓両国にとって大きな意味があり、同大学の価値を高めることにつながっていると思われる⁽⁴⁾。

大学としての価値高める

跡見にとって、桶川ストーカー殺人事件はつらい出来事だった。大切な学生を失ったというだけでなく、詩織さんへの中傷ピラが大学構内や最寄り駅で撒かれたり、報道陣が大学に押し寄せたりして迷惑なこともあっただろう。そんななかでも、猪野京子さんは、ピラが撒かれた後で大学に説明に訪れたとき、大学関係者から親身に心配してもらってとてもありがたかったと話しておられた。話すことができなくなった娘に代わって真相を訴え続ける猪野夫妻を、当時のように支えることができればと思う。

詩織さんは図書館司書になる夢を抱いて跡見に通っていたという。明るくて元気な普通の女子大学生だった。殺されるようなことは何もしていない。しかし、清水記者や鳥越さんの仕事があったにもかかわらず名誉回復が十分なされたいがたく、いまだに偏見を持っている人もいる。同じ大学で学ぶ縁を得た私たちだからこそ、事件を風化させず、真相を語り続け、彼女の名誉を回復し続けられたらと考えている。

2019年は事件から20年の節目で、多くのマスコミが事件を取り上げていた。日本社会にとって、忘れてはならない事件なのだ。跡見が事件の教訓を社会に発信していくことができれば、社会貢

献になり、大学の価値を大きく高めることにもつながるのではないだろうか。

注

- (1) 清水潔『遺言——桶川ストーカー殺人事件の深層』（2000年10月、新潮社：44ff.）。なお、清水潔記者の取材過程については、本書をもとに筆者が要約。
- (2) 清水前掲書（146f.）。
- (3) 清水前掲書（148ff. 要約）。
- (4) 尹東柱を追悼する活動は、彼が過ごした京都、福岡でも行われており、それぞれ協力しあっている。

参考文献

鳥越俊太郎&取材班『桶川女子大生ストーカー殺人事件』（2000年10月、メディアファクトリー）

鳥越俊太郎・小林ゆうこ『虚誕——警察につくられた桶川ストーカー殺人事件』（2002年11月、岩波書店）